

第1章 天明の蝦夷地調査

1. 天明5年 庵原弥六

蝦夷地の最北に位置しカラフトに対する宗谷には、たびたび幕府の調査隊がやってきた。中でも天明の蝦夷地調査と寛政の調査は代表的なものだった。

天明5年(1785)、6年、幕府は初めての蝦夷地を大々的に探検している。普請役青島俊蔵のほか、山口鉄五郎高品、庵原弥六宣方、佐藤玄六郎行信、皆川沖右衛門秀道がいて、その下に里見平蔵、引佐新兵衛、大塚小一郎、大石逸平、鈴木清七、最上徳内の6人がいた。隊長格は佐藤で、その後の蝦夷地探検の方向を左右した大きなものだったが、このうち現在までそれなりに名を残しているのは、最上徳内だけだろう。

ことの起こりは、老中田沼意次の元に持ち込まれた工藤平助の「赤蝦夷風説之事」だった。赤蝦夷とはロシアのことであり、ロシアが千島や蝦夷地にやって来て抜け荷をしている……と言った内容の本だ。これが元でロシアの動きに注目した田沼は、蝦夷地の調査に取りかかるのである。その中心人物勘定奉行松本秀持の建議内容によると、ひんぴんと北辺に姿をみせつつあるロシア船の動向と交易の有無、密貿易をはじめ金銀の産出状況と産物検分の広範囲にわたっていた。

天明5年(1785)老中田沼意次のもと、勘定奉行松本秀持によって計画された蝦夷地調査は普請役5人とその配下によって行動が起こされた。東蝦夷班と西蝦夷班に分け、指揮班ないし予備班も設



庵原弥六の墓

けられた。青島と山口、最上らは東蝦夷に向かい、クナシリまで渡っている。一方西蝦夷地の要衝宗谷には普請役庵原弥六、佐藤玄六郎と同下役引佐新兵衛、鈴木清七ほか小者、竿取が松前藩士を案内役に立て同年6月20日宗谷を訪れた。この旅は本拠を置いた松前から船で4日かかっている。一行のうち庵原弥六は佐藤玄六郎を宗谷に残して、7月2日、下役引佐新兵衛、鈴木清七らを伴ってカラフト検分に海峡を渡った。シラヌシ付近から陸上には全く道がなく、海岸も磯浜続きで岩石が多く船の通行も不便で、

小さい舟にわずかばかりの食糧を入れ、海岸に沿って北上したのである。これはカラフト探検の先鞭と言ってもよい。

『小さな集落があれば舟を止め、道を聞きながらの10日余りの旅でタラントマリに着いたが、食糧が尽き引き返した。シラヌシから東に向かい、アニワ湾岸の探検を続け7日でシレットコという地に至る。ここで再び食糧も尽きたのでシラヌシまで戻り、心を残しながらソウヤに帰るのである』(天明蝦夷探検始末記)

彼らは帰着すると佐藤に対し、来春再び渡海のうえ、十分に奥地の探検を果たしたいと語り、かねて蝦夷地の「寒気試み」のためもあり、ソウヤに越冬したい旨を告げた。また鈴木は、単身船を使って中部蝦夷(オホーツク沿岸)の探検に出ている。そして東蝦夷班に合流した。



庵原弥六の墓

指揮班の佐藤は船で蝦夷地を一周している。これは和人としては初の記録だろう。

これらの調査記録は、佐藤によって詳しくなされ、蝦夷地開発計画として提出されている。〔「蝦夷拾遺」現代の研究書に「天明蝦夷探検始末記」照井壮助がある〕

2. 庵原弥六の越冬と死

日本人として記録に残されている最初のカラフト探検者幕府御普請役、庵原弥六は、雪どけの春を待たずに、再度の壮挙を前にして、天明6年3月15日(墓碑16日)さびしく宗谷で息をひきとった。

弥六と行動をとともにすべくソウヤに残留越冬した松前藩士柴田文蔵ら十数人からなる西蝦夷地班は、どんな状況下で天明6年(1786)の春を迎えたのだろうか。

それは、探検史上でも数少ない悲惨な状況だった。

『庵原らは、ソウヤの寒さが、いかに過酷なものであるかについては全く知識がなく、あるいはこれを侮(アナド)って万全の越冬準備に欠けていたのではないだろうか。

寒地に暮らす夷人の生活が、ほとんど魚獣の生肉など、古来から彼ら独特の栄養補給の方法があっただろうが、菜食に馴れた和人の体質は、冬枯れの蝦夷地では、これら栄養の補給をする方法が得られなかったものと思われる。〔「蝦夷拾遺(エゾシュウイ)」には、『霧気の中(アタ)り』と記されているが、その死におそわれた時期は寒気苛烈の最中ではなく、日射しのようにやく強くなった時期であり、栄養失調により発病したと判断するのが妥当であろう。』

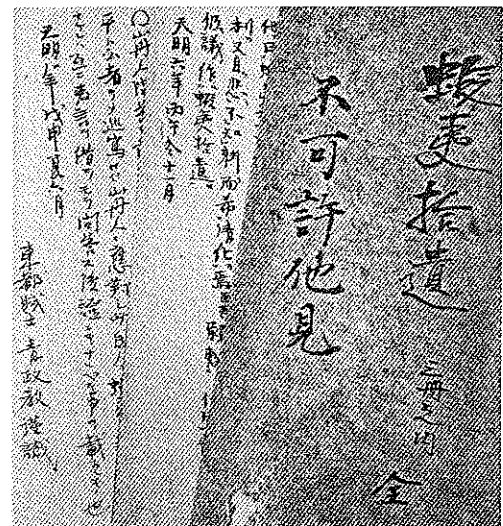
『彼らは二月になると、いちようにバタバタと倒れていった。三月に入り、ようやく寒気は緩みはじめたものの、病状はかえって次第に重くなるのであった。

このころ、危機を報ずる手紙がおそらく通詞(通訳)によってしたためられ、夷人の一人が飛脚として松前に走ったらしく思われる。しかし、当時ソウヤと松前との間に駅らしいものも全くなく、片道早くて一カ月を要した。

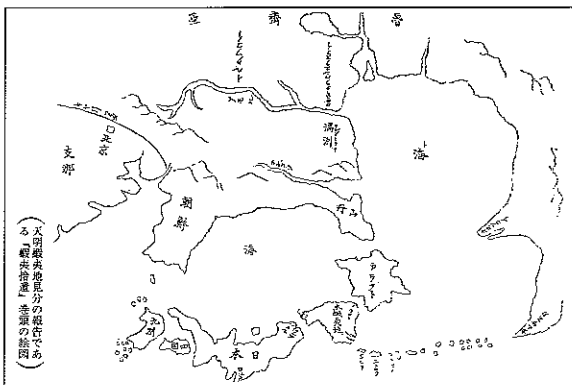
一同は付近のアイヌ人の介抱に頼るほかはなく、病床に転がって空しく死を待つだけの姿であった。

比較的軽い身分の者どもは自分の症状を省みる暇もなく、命の続く限り上司の介護に立たねばならぬ有様であった。

ついに死者が出る。3月2日、まず松前藩から案内役として付けられた一行のうち、鉄砲足軽の田村運次郎が、病と介護の疲れで倒れ息を引きとり、ようやく屍を葬り終わった3月7日、通詞の長右衛門が死亡した。彼は一行の危機をみては、自分の病勢にかまわず立ち動かすにはいられぬ立場であった。アイヌ人飛脚を松前に走らせ、アイヌを差配して病人の介護に当たらせ、ほとんど息を引きとる寸前まで働きつめたためであろう、その死は突然訪れたようである。



蝦夷拾遺



蝦夷拾遺の図

ソウヤの異変を夢にも知らず、大石逸平(東蝦夷地班、青島俊蔵の下役、5年調査を終え、6年のカラフト再調査の先渡を命じられ、4月18日ソウヤ到着。6月中旬カラフト探検、8月7日ソウヤ着)がソウヤへの道を急いでいた頃、弥六もカラフトを眼前に望みつつあえなく倒れていった。3月15日のことであった。懸命に介護に当たった彼の下役引地新兵衛、鈴木清七ら二人の悲観と落胆は大きかった。これで終わりにならず、3月21日、松前藩士の工藤忠左衛門が死亡した。彼も、長らく重体がつづいた上司柴田文蔵の介抱疲れが死を早めた。さらにその柴田文蔵が3月28日に落命した。5人の犠牲者が出るに及んだころ、生き残りの者たちもようやく重篤(ジュウトク)の状態から免れ、少しずつ快気に向かい、やや生色を取り戻すようになった。……』(天明蝦夷探検始末記)

つまりそのころのソウヤは、よそ者には堪え難い寒冷の地だったのである。

弥六の死より6年後、寛政4年(1792)幕府の御救交易の一行にしたがって宗谷を訪ねた串原右仲(ウチュウ)が『夷諺俗話(イゲンゾクワ)』のなかに、蝦夷地「宗谷の寝棺」の話しを記録している。

『……ソウヤにて越年するとき、キツと言って厚き板にて、一人前一畳敷ほど高さ三尺程に箱をこしらえ、その中に笹の葉を厚く敷き、上へ熊の皮を敷き、その上にフトンを敷き、夜具に包まり、箱に蓋をして寝る也。雪には、囲炉裏にて薪を多く焚いてあたり寝るに、朝起きてあたりを見れば炉の灰も氷り上りて霜柱のごとく成るなり』(稚内市史第一巻)。考えてみれば、おそろしいほどの切実な知恵である。

しかし、決して気楽なものではなかつただろう。箱の中に入り、フタをして寝るというのだから、まさに葬儀の寝棺で夜を明かすようなものである。来る日も来る夜も、寝棺で寝るのである。それをしなければ、冬の夜の寒さを防ぐことができない。このまま死ぬのではないか。そんな恐怖をサムライたちは、口にこそ出さないにしても思ったことだろう。囲炉裏の灰が翌朝には霜柱のようになっているという記録は、切迫感があり寒気を感じさせる。そのために春の陽光を待つことなく、宗谷の冬は多くの武士たちの命を散らしたのである。

その後の調べでは、「寝棺くらし」にはモデルがあつたらしい。会津地方の『ネバコ』、長野の『ハコドコ』などで、底には稲藁を厚く敷いてフトンを敷いている。

『…折りたたみ式の夜具入を工夫し考案した内地からの移入した夜具である。これは冬に厳しい東北の内陸地、会津の田島や南会津の山村で、どこの家でも、使われている寝床の道具で、実用品であった。会津からの文化が、この北辺の地で貴重に利用され、凍てつく寒波にも温もることのできる、東北文化の移行であった』(稚内文庫4「北への航路」)

このときの犠牲は、寒気に不馴れな江戸者だけでなく、比較的寒さに強いはずの松前藩士の案内役工藤忠右衛門、田村運次郎が3月2日に逝き、弥六が亡くなる9日前の7日に通詞長の長右衛門、また28日にはやはり松前藩士柴田文蔵が死んでいる。

弥六の同僚佐藤玄六郎著「蝦夷拾遺」の序の中で、同僚であり東蝦夷地調査にまわった青島俊蔵は「弥六宣方、松前より西北ソウヤという所で、霧気にあてられ病死す」と記したが、これは寒さを防ぐため戸じまりを嚴重にして部屋の中で焚火にかじりついていたのと、野菜不足からくる後年いわれる水腫病に罹ったものとみてよい。

3. 天明6年 大石逸平

天明6年(1786)は、前年の出発の遅れを反省して、新春早々にまず東蝦夷班が出た。最上徳内が

単身陸路を進み、後を山口鉄五郎らが進む。クナシリで合流し、エトロフからウルップ島まで渡る。最上はロシア人との接触も行っている。一方、宗谷で冬を越した西蝦夷班は、庵原弥六ほかが極寒と壊血病で病死した。そして残りの者達も松前に送還された。

弥六があれほど心に期していたカラフト再調査は、前年東蝦夷地調査に向かい下役から普請役に取り立てられた大石逸平に引き継がれた。4月18日逸平は松前から宗谷に至り、病死した弥六の後始末をつけ、5月3日アイヌの舟に乗りカラフトをめざしたが、時化にあい8日もかかって能登呂に上陸、自主で首長たちを集め、踏査の準備と相談を持ちかけ協力を得ることができた。船の準備がととのうまでの4、5日、そのへんを歩いて足ならしをして帰り、アイヌの舟5艘の準備もできていたので食糧を積み、アイヌを案内にたて、西岸ぞいに北上をはじめたのは、5月中旬頃と思われる。

「シラヌシを出るとクスネルシ、オットチシ、アカラベシ、ショウニ(宗仁)、ウエンチシなどなどの小さな夷人部落を経て海上約30里でナヤシに至った。後世の南名好の地点である。ここの沖にトド島という島が見られた。後の海馬島と呼ばれた島である。ナヤシから北に岸伝いに進むとオテン、マツランナイボ、ベキニ、シイナヒ、レフンソヤ、トコンボウを経た。トコンボウには小さな浜があって小舟の泊りは可能であった。それからツンナイオロ、トコシナイとたどる。トコシナイには川が流れ落ちていて蝦夷船は通れるとある。後の内幌のあたりかも知れぬが不詳である。それからオントゲシ、トブシ・ウコウ・オゴ・アサンナイとたどってタラントマリを経る。そして一行の船隊はいよいよオオトマリに着いた。ここは後世の真岡付近であろう。『左右に山崎出テ風波ヲ凌ギ、海水岸下ニ到ル迄深シ。大船モ案内ヲ得、洋中ヨリ直ニ来テ泊ルニ憂有(ウレイアル)ベカラズ』と記録されている。おそらくこの港に泊してさらに北上をつづけ、ピロク、キトウシナイボ、エンルンコオマナイ、オニチウボ、トオロ、ノトロ(後の小ノトロ)、アルコエ、ハウテケシカ、レブンソヤを経て船隊はナヨロに着岸した。」

「すでに30日を費す旅程であり、6月も10日前後になっていたのである。このナヨロの地は、『蝦夷拾遺』の記載によれば『平原広々トシテ中に大河流レ海ニ落ち、暫ク水上迄蝦夷船通ズ、大船モ此川ニ入テ泊ルニ於テハ風波ノ憂ヲ知ベカラス』とあり、後世の泊居の地点であろうかと思われる……。ナヨロを發して一日漕いで北上すると、そこはクスリナイ(後世の久春内)の地であった。この地点は南部カラフトの交通上の要点であり、この地から東に山を越えてマヌイを経、東北に途をたどればタライカに出られるところである。『拾遺』には『蝦夷ノ戸口乏シク河ニ臨テ二三戸有ルノミ、凡ソ七八里ヲ介シテ徑十里余ノ湖水有リ、冬ニ至リ氷ルヲ待テ是ヲ渡ル、マタ山ヲ越へ、行程三十日ニシテ東北ノ海浜タライカニ通ズ。シラヌシヨリクスリナイ迄海岸ノ行程三百里ニ近シ。此間蝦夷ノ戸口最モ乏シ。』と記されてあるのである。」「天明蝦夷探検始末記」

大石はなおもその奥地を探ろうとした。しかし、これを案内の夷人たちに相談したところ、この先々はいっそう蝦夷の戸口も少なく、海陸共に通行は容易でない。食糧の底がみえてきたこともあり名寄に戻り、ここで手のとどく限りの首長を集め聞き取り、地理を詳しくまとめた。

逸平の宗谷帰着は7月7日のことであった。そこには6月23日以来、同僚だった里見平三が待っていた。2人はカラフト調査のことなど語り合ったり、ここで病死した庵原弥六の生前のおもかげをしのんだり、12日間寝起き共にした。

7月19日、逸平は船に乗って宗谷を發ちオホーツク海をまわって8月11日厚岸に達し、そこで山口鉄五郎らと落ち合い、共に御用船「五社丸」に身を委ね、10日間の海路を経て松前に戻った。一方、里見平三は宗谷に残り庵原弥六の残務整理にあたり、逸平より2日おくれ、やはり船で宗谷を發ち、

西海岸まわりで帰途についた。

弥六はカラフト再踏査にどれだけの見込みをもっていたのかわからないが、大石逸平の踏査は弥六が考えていた以上の成果であったろう。

彼らの探検は、ある意味幕府上げての壮大な事業だった。そしてロシア勢力の南下や大陸情勢などをつかみ、また地理的にも大きな成果を上げたと言えるだろう。青島、山口、大石、そして最上とそれぞれ価値ある探検を行った。隊長だった佐藤の活躍も見逃せない。しかし、その名が(最上徳内を除いて)消される元となる出来事が江戸で進行していた。

4. 将軍家治の死と田沼意次の失脚

天明6年8月25日に将軍家治が死去、その2日後に田沼意次が失脚し、松平定信の時代となった。そのことは、蝦夷地探検隊の罷免であり、探検事業の中止となって現われた。すでに山口と佐藤は江戸に帰還していたが、青島、皆川は松前に残された。その後、探検記録「蝦夷拾遺」が執筆されるが、アイヌの民俗から自然、人文、地理などが詳しく報告され、ロシア人に関しても報告されている。ロシアの歴史やロシア語まで収録され、禁制のキリスト教、ギリシャ正教まで詳しく紹介されているが、この報告書は幕府からまったく無視された。いや、後に処分される理由とさえなった。青島以外は、帰村を命じられ、青島は最上とともに松前に残務処理を行ったうえ、江戸にもどって御用御免となった。もちろん各人の部下もみんな浪人となった。青島はその後「蝦夷拾遺」を改訂し、より詳細な報告書を密かにまとめた。

ところが、数年後クナシリでアイヌ人の暴動が起きる。そのため青島が再起用され、最上とともに再び蝦夷地に入り現地調査を行い、暴動の原因や経緯を報告した。だが、その内容に対する反発が出て、「松前藩となれ合っている」、それどころか以前の蝦夷探検が暴動の芽を生み出したと松平定信に決めつけられてしまった。かくして青島および最上は連行され牢屋に入れられるのである。幸い身分の低い最上は釈放されるが、青島は遠島を申し渡されたが、刑執行の前に病に倒れ亡くなってしまい、天明の蝦夷探検の成果は封印されてしまった。

5. 庵原一族

庵原弥六には後継ぎがないため、庵原家は断絶となって、墓標のみが宗谷の一角に残され風雪にさらされていたが、寛政10年(1798)宗谷巡回にやってきた勘定吟味役三橋藤右衛門は、「辺地に出役して病死するのは戦死にもひとしい」と幕府に進言し、庵原家は再興された。

藤右衛門が宗谷にきてから3年後、弥六13回忌の寛政12年(1800)3月、庵原家を継いだ庵原久作時敏が宗谷にきて、現在宗谷に残っている墓碑に建てかえ冥福を祈った。

庵原一族と蝦夷地との関わりは深く、養曾祖父の弥六は蝦夷地調査の越冬中ソウヤで天明6年3月15日客死。その養子(祖父)時敏は松前奉行調役下役を勤め、現存する墓を建立した。実父亮平剛も調役下役を勤めたあと、嘉永7年8月函館亀田に移住し開拓に当たった。又、勇三郎の実兄庵原孫三郎は函館在住となり銭亀沢を開拓している。

その孫にあたる「庵原勇三郎」(天保2年生れ)は梨本弥五郎の部下として、安政3年(1856)ソウヤに赴任している。時敏以下代々奉行所調役下役を勤め、慶応2年当時定役(安政6年に改称)。

6. 寛政の調査

寛政の蝦夷地調査は、天明調査の犠牲者弥六の庵原家再興に大きな役割を演じた勘定吟味役三橋藤右衛門一行による宗谷巡察であった。

この巡察は目付役渡辺久蔵、使番大河内善兵衛、勘定吟味役三橋藤右衛門らが中心になっているが、このとき後年宗谷を訪れる近藤重蔵や最上徳内は大河内善兵衛の配下として東蝦夷地千島巡察に向かっている。

宗谷をめざす三橋藤右衛門一行は26名をもって編成され、5月25日松前から千歳越えの道程をとった。海岸ぞいに内浦湾をまわって千歳を越え、石狩川に出て舟で河口いわゆる日本海側に達するという迂回路であった。石狩から増毛のあいだの断崖を抜けると、あとは割に平坦な海岸線が宗谷まで続いていた。

一行が宗谷に着いたのは7月7日、松前から約1カ月半かかったことになるが、松前から舟で一路宗谷に達する楽な海路をとらなかったところに、この巡察の特徴があった。

藤右衛門は陣羽織、股引に草軽がけ、侍分10人、用給3人、近習3人、中小姓4人、侍士以下16人の従者たちは割籠弁当と予備の草軽一足ずつを腰に結び、具足一箱、夜具を入れた長持1棹、雨具は各自が蓑を携え、陣笠を用いるという、大がかりな長い旅であった。

これに随行の武藤勘蔵は「蝦夷日記」を著わすことになるが、その日記によると、一行の宗谷滞在は8日間にわたっている。

ここでオムシヤを執行した。それも俗にいうアイヌから土産物を求める形式のオムシヤではなく、むしろ、巡察にあたって便宜をうけたお礼の大酒宴であった。

会場は運上屋前の砂地が選ばれ、宗谷乙名ウダトムウングルをはじめ、遠くは苫前、天塩あたりまでのアイヌ170～80人が招かれたが、アイヌたちは藤右衛門を「カムイトノ」とあがめ、その繁栄を祈って歌い踊ったことが「蝦夷日記」に書かれている。

北方におけるロシア勢力の侵攻を阻止するうえからも、アイヌ撫育という課題は大きな意味もっていた。

藤右衛門一行の巡察は、そういう役目もあって一応宗谷の平穏を見とどけて帰ったが、実はそれから5年後の文化2年(1805)、ロシア艦船がノシャップ沖に錨をおろして、乗組員が上陸するという事件が起きた。

7. 御救交易

老中田沼意次の失脚後、一時北方警備に冷淡であった幕府の中にも、クナシリ・メナシの騒乱を契機として松前藩を移封し、幕府自らの手で辺境を治めようとの強硬な意見も出るほどであったが、まず松前藩の善後策を見守ることとなり、その監督を兼ね模範的な交易を試みる御救(オスクイ)交易を行った。

それは松前藩が直接または請負人を通じて行うアイヌ交易の一部を、幕府が直接に模範的に行うとしたもので、かつて天明5・6年の調査の際も、調査を助けるために2隻の商船を建造し、試験交易を行い、成功をおさめた経験に基づくものであった。かくて寛政3(1791)年普請役田辺安蔵、小人目付高橋助四郎、豊田源八郎らは厚岸に至って交易を営み、同5年まで実施し、その成績はすこぶる良好で、後に幕府東蝦夷地直搦(ジカサバキ)の基礎をなした。

村山伝兵衛が宗谷場所を請負っていた寛政4年(1792)幕府は宗谷において御救交易を行なった。和人の狡猾な交易がアイヌを刺激してとかく揉め事を起こしているのが不正を取り除きアイヌの信頼を得ようと試みたものである。小人目付木村大蔵、串原右仲らが宗谷に御救交易会所をもうけて采配をとり、一行のうち普請役中村小一郎、下役的井要助らは斜里巡察に向かった。宗谷では阿部屋の支配人村山長三郎を通辞に立て、下役今井元広、長川仲右衛門の兩人を野寒布、抜海の漁場に出張させた。御救交易は海鼠漁を主とし、鯨についても行なわれ、5月中旬から着手して7月中旬に終わっている。その範囲は宗谷を中心に西はクッサフ(南稚内)、野寒布、抜海、ルエラニ(坂の下)、東はシルシ(大岬)の六漁場だった。

天明の蝦夷探検の成果は封印されてしまったが、幸い生き残りともいべき最上徳内は、その後復権して蝦夷地の第一人者として次々と探検を重ね、その名を残す。しかし彼の業績の根本に天明の探検があったことを忘れてはならない。また、その後続く近藤重蔵、松田伝十郎、間宮林蔵、そして松浦武四郎……などの高名な蝦夷探検家も、天明の成果なくして、現在伝えられる業績を残すことができなかつたかもしれない。まったくの冤罪で死に追いやられた青島のほか、復権することなく消えて行った人達の無念を感じる。

なお、天明を遡る蝦夷地探検の先駆者としては、松前藩の探検がある。松前氏の祖は、1454年に蝦夷渡島半島に渡った武田信弘で、彼は南部を統一して蠣崎氏を名乗り、さらに松前と姓を改めた。そして藩独力で蝦夷地やカラフトを探検している。記録では、1633年より幾度かの探検で蝦夷の地図を完成させ、カラフト南部を調査した。これは世界的に見ても、この地方のもっとも先駆的な探検だろう。惜しむべくは、これらが秘密裏の探検であり、しかも科学的な計測による地図ではなかつたことである。しかし、伝聞情報を元にしたのかもしれないものの、蝦夷とカラフトを島としているなど、地理的な所見としては非常に重要な点が含まれて興味深い。

(稚内市史、稚内市史第2巻、稚内百年史 知られざる探検家 他)